

3-⑰ 指導方法・評価等の工夫・改善

学級担任が主体となって進める「外国語活動、外国語科」の授業改善

佐渡市立行谷小学校 笠井 猛雄

1 研究の視点に関する実態

当校では、中・高学年すべての学級で、ALTと学級担任とのTTによる「外国語活動、外国語科」(以下、外国語活動)の授業を実施している。しかしながら、ネイティブから学ぶ機会が充実している反面、学級担任の主体性が薄く、ALT主導で授業が進められていた。

授業プランについては、授業直前に、学級担任から学習内容が示され、簡単な打ち合わせをする程度であった。学級担任とALTとのコミュニケーションが十分とれているとは言えない。

外国語活動は、学級担任が指導することが原則である。外国語活動における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、まずは、学級担任が主体となった授業改善に取り組んだ。

2 改善のための具体的な方策と取組内容

(1) 教材の選定と資料提供

文科省作成配布補助教材「Let's try!」と「We can!」を中心的な教材として使用することを全体で確認した。高学年については、外国語科のねらいを指向しつつ、「Hi, friends!」も必要に応じて取り入れ、学級の実態に即した活動内容を工夫するよう助言した。また、教材研究のための資料は、文科省HPから一括ダウンロードしてすぐに活用できるようにしている。

(2) 「中核教員」の育成

中・高等学校の英語の免許を所有するA教諭を、校内における「中核教員」として位置付け、A教諭を中心に外国語活動の授業改善の取組を推進している。また、A教諭を県及び市の研修講座へ推薦するなど、外国語教育推進の担い手としての力量形成を図っている。

(3) 校内研修の充実

<校長によるミニ研修>

- 新教材「Let's try!」「We can!」の作成意図と使用する際の留意点
(Small Talkの重要性、学習者の想定、外国語科の授業イメージの共有…等)
- 外国語活動と外国語科の目標の違い
- 中心的な指導者としての学級担任の役割とALTとの連携の在り方

<中核教員を中心とした授業づくり研修>

- Small Talkの模擬授業と動画による授業イメージの共有
- 中核教員の実践紹介(必然性のある言語活動を取り入れた単元構成等)
- 共通実践の提案(板書、ノート指導、クラスルーム・イングリッシュ)

(4) 校長による授業観察と対話

外国語活動の授業に限らず、毎日全学級の授業観察を行い、必要に応じて授業者をサポートしている。放課後には、一人一人と対話をして、具体的な子どもの姿から一人一人の教員の取組の良さを認め、激励・称賛したり感謝の言葉を伝えたりする。必要に応じて指導・助言も行う。さらには、個々の取組の成果を全体で共有する働きかけを随時行っている。

(5) 先進校の視察(研究会への参加)

5月、附属長岡校園の研究会に参加した。6年生の外国語活動の授業参観・協議会、講演会を通して、主体的・対話的で深い学びを目指した外国語活動・外国語科の授業の在り方について学ぶことができた。ここで学んだことを校内の教職員に向けて伝達するなど、校長自ら率先して学び、校内の取組をリードしている。

3 取組の成果と残された課題

“Hello, everyone. It's time for English class.”という学級担任の発話から外国語活動の授業がスタートするようになったことが一番の成果である。本時の課題を板書したり、デジタル教材を活用したり、Small Talkを取り入れたりするなど、授業改善に向けた教員一人一人の意識の高まりが見られる。主体的・対話的で深い学びを目指したさらなる授業改善はもとより、評価方法の開発、教員の英語力の向上、ALTとの打ち合わせの時間の確保が今後の課題である。